

# 哲學研究 第五十四號

第五卷  
第九冊

## 自然の理性化

西 晋 一 郎

一

道德の問題は自然と區別すべき精神の問題であるといふことを得。この精神とは眞の意義に於て主客相對する主、即ち所謂自ら主となる主、精神の精神ともいふべきもので、心理學で通常取扱ふ所謂精神現象は此精神から見れば矢張り自然現象ともいふべきである。自然を對象とする精神は認識對象に對する認識主觀に過ぎぬ。他人を只認識對象とのみ見る間は未だ道德的精神を實現して居らぬ。人の面を見たとして、又其心理作用を考察したとして人格を認めたとはいふを得ず。人間を目的そのものと見るによつて自分が人格となるので、人格は只人格を對象とする働きによつてのみ成るのである。於此始めて精神界が出現するので、其以前は所謂自己

も畢竟自然物に過ぎぬ、即ち其實自己といふべきものでない。従つて精神界とは精神對精神の世界のことで、精神界が眞の意味に於ての社會である。其以前は智力勇力を以て生存競争をなし、或は智力を以て妥協を計り、或は種々の本能によつて互に相狎れ親しむ自然界あるのみで、これは眞の社會の前段階であつて、普通の意味に於ては社會と謂つてをるとも、其實は他を自己感情擴張の範圍に取り入れ又は他を自己満足の道具としてをる生活であるから、自己と對立する眞の伴侶といふものは無いので、即ち眞の社會的生活ではない。自己に對立する他の自己がないからつまり自己はまだどこにも現はれてをらぬ。文化生活と自然生活の限界は精神の出現にあるので、古昔漢土に禮儀の俗と夷狄を區別し後者を賤んで禽獸の俗と同列に見たのは、其互に相親しむも只禽獸の本能的狎愛に過ぎず、其智術其勇氣も欲望満足の武器に過ぎざる自然生活として貶したのである。人格即ち道德的精神との連貫を背後に控へて居らぬ限りは一切の經濟的發達も欲望満足の機關の進歩、自然生活の複雑巧妙といふに過ぎざるべく、富の公平なる分配といふ如きも争を避くる巧みなる方法といふに過ぎずして、何等道德的正義などと謂ふべきものでない。所謂天賦の權利の如きヘルバルトも指摘した通り權利なるものを物體に屬する品質同前に考

ふる世俗の見から言ふとであつて、自然物には權利といふものは無いのである、而して精神出現以前の人間は自然物である。自己の權利と言つても、自己は他の自己に對すればこそ即ち他の自己を認容すればこそ自己となるのである故、此對立聯關の客觀界の成立と共に自己が現はれ、始めて自己の權利といふともある。自己未だあらざる所には自己の權利も無い。自己も權利も共に客觀界のことである、客觀界は精神界以外には眞の意味に於ては無い。固より自然界も其を認識する主觀が其原理に於ては超個人的である以上之を客觀界といふことを得るも、道徳的統一原理から見れば眞の客觀界の一側面といはねばならぬ。(客觀的精神については西田氏の「意志論」にある。)

## 二

眞の自己であるべき精神は客觀的精神であるが、此精神の實現せらるる過程は必ずしも一樣ならぬやうである、只其本質に於ては同一でなければならぬ。夫の孟子の説いた四端の心の如きは皆精神實現の端緒である。四端の心と喜怒哀樂愛欲惡の七情とは廣く言へば何れも情であるが七情から直ぐに道徳に入ることとは出來ぬ

に四端から入るとを得るについては其所に重大なる性質上の相違がなければならぬ。是に就ては往時朝鮮の朱子學派の學者間に所謂四七の議論があつた由で、四七の相違を根本的と見たものは朱子の所謂理發氣發の區別を根據としたやうである。いづれも情ではあるが四端は理から發し七情は氣から發すといふのである。斯の如き區別は甚だ謂はれなきやうに見えるが、カントが情は經驗的であるが只獨り道徳法を尊敬する情は純粹感情である、直ちに理性に其源を發するものであるとしてをるのと同一見解と思はれる。尙ほカントが判斷を限定的なるものと反省的なるものに區分した考へ方に從つて考へるときは七情は情の限定的なるもの四端は情の反省的なるものとも見ることを得。一は發展分化に伴ふ情であるが、一は根本的統一に反へる努力に伴ふ情又反へらしむる情である。此所に四端は情から性に復へらしむるもの、即ち精神を實現せしむる作用たる理由がある。固より單に分析的に觀察しても喜怒哀樂と惻隱羞惡辭讓是非とは餘程性質を異にする所があり、孟子も四端を情とは言はず心と言つてをる、特に是非の心は情とは見難いやうである。しかし四端は大體之を情といふ外なかるべく、特に其發端の所は全く情である。又四端各々道徳に導く道が違つて、所謂仁義禮智のそれぞれに導くのである。就中惻

隠が仁に復へらしめ羞惡が義に復へらしめる相違は宗教と道德の相違すべき所を情的出發點に於て既に指示するもので、恥づる情は特に道德的なる情である、即ち自己對立聯關の上に發する社會的なるもので、惻隱の情が他を自己の中に感じ入れる自己感情擴張の意味あるのと餘程趣きを異にしてをる。

四端の外に孟子は良知良能を掲げてをる、即ち父兄を敬愛する情である。儒は敬愛を佛は知恩報徳を説くが、感謝の心は敬愛の情と相表裏するから歸する所は一つである。感謝、敬愛は四端と同様に吾人を理性に導くもの、根原的統一に復へらしむるものである。感謝、敬愛はカントの所謂純粹感情であつて、理から發するもの、理性者にのみ特に見る所である。此情によつて淨化せられて自然的生活は理性の光を放つやうになる。自然の理性化とは所謂アン、ジヒには理性的である自然が自己を知ることであつて、始めて自ら主となり、始めて眞に精神となる。倫理宗教的に淨化といふは哲學的に無限化、普遍化といふことであつて、限定的統一、抽象的把握を超へて具體的普遍に復へる又は進むのである。道德でいふ己私とは抽象的一面に局して具體的全體と暫く隔絶せる態である。感謝、敬愛は反始的又は反省的情であるから所謂具體的普遍の統一を求めるのである、理性者が理性に自覺せんとする希求の聲

ともいふべきもの、人が己の本原に反へらんとする勢である。

## 三

恩とか恵とか愛とかいふものに對して感謝の心は發するが感謝は本に反省する情なるが故此情からして恩愛恵の真相にも達することを得る。感謝の情は必ず其對象を敬愛する情として現はれる。敬愛は人が其本原に還へらんとする希求である。父母は我身の本である、父母に感謝し之を敬愛するは我身の本に歸一する心である。凡て本に歸一するを順といふ。天地は群類の本である、天地に感謝し天地を敬愛するは一切の本に歸一する心であつて、天地に順なるのである。天地が感謝、敬愛の對象となるとき宗教が發する。感謝、敬愛の發するは自然には父母に對してである、これ孝の端である。故に天地に對するときも自然に之を父母の如くに心に描がく、天父と呼ぶは此自然の情をそのまま言葉に表はしたのであらう。宗教とは神明即天父に順なること、天父に孝なることである。これ孝の理が宇宙至上の理なる所以であつて、孝の本來は生命の淵源に徹すること、萬物の本體を明にすることである。既に萬物の本體を明にせば本體と一である。これ中江藤樹の説の深い意味で

あらうと思ふ。曰く太虚本體の神靈方寸にあるものを孝とす、所謂未發の中是なり(と翁問答)。されば感謝敬愛は孝の情であつて、孝の理性は本體そのものであるといふ意味になる。

親愛の情は限定的である、氣發である。敬は反省的の情である、理性から發する。

故に孔子曰く敬せざれば何を以て之を別たんやと。親子相親しむは只本能的である、孝は本能にあらず、本能の理性化である。敬は感謝と相表裏する、感謝するは之を拜し之を頂く氣味がある、即ち眞の尊敬の情である。敬によつてさきの本能的の愛は理性的の愛に轉ずる、これ敬愛である。之を敬愛すれば之に順である。故に孝は孝順である。順の絶對的なるものは信である、絶對的の信賴である。これ孝である。

故に感謝敬愛、順、信、孝は畢竟一であつて、あらゆる隔離、間隙、局限、即ちあらゆる抽象を超へて一切が疏通融會する所以、限定から反省して全體に還へり、此全體の統一によつて一切限定が直接に統一せられて具體的の限定となる、未から本に反へり本から末に通じて循環窮りなき所以である。果して然りとせば孝は人間特殊の自然的關係に端を發して人倫の本とせられてをるも其實は宗教道德共通の境たる自由界に通ずるものである。或は孝は親子の血縁的關係の上に發するもの故神明、天父に對す

る敬愛、感謝と同日の談にあらずと思はれるかも知れども、孝は本能的親愛ではなく、感謝によつて理性化、普遍化せられた敬愛である。其對象を如何様に心裡に描寫しやうとも敬愛の情そのものに二つはない、若し二心ならばこれ純なる敬愛でないから、父母に孝であるとも言ふことを得ぬ。宗教をシユライエルマヘルは誠敬 (Eromigkeit) と見てゐるが、即ち敬愛の心である。此敬愛の對象を肉身の父母と念ずると天父と念ずるとの相違が、若し其念ずる心像の相違にありとせば、これ神明を感性的に寫して感性的存在と、其甲乙を争ふものと謂ふべく、眞の宗教即ち誠敬其物を去ること寧ろ遠しと予は思ふのである。所謂昊天に父母に號泣するは愛慕歸依の心に於て昊天と父母は合一することを示してゐるのではなからうか。一人の親に敬愛なる心は神明に通ずるものとせられてゐる。右の如き意味に於て我邦并に漢土に於ては孝は全く宗教である。敬愛、順信と見れば孝は宗教であるが、藤樹の如く本體を見ることがすれば、孝は最上の學である。忠孝、忠は我邦に於ては國の本に反へり、國祖に孝なることである、一面宗教であるから、和漢に於ては西洋に於ける如く、道德の外に宗教の必要をさほどに説かぬのであらう。

感謝によつてあらゆる局限の原由たる抽象を超へて一切が直接に全體と通ずる



故末から本に反へり本から末に發して循環窮り無いのである。惠ぐみ生みて息まざる創造的原理とは如何なるものなるか、汲めども盡きざる泉とか無盡藏とかいふことは實は思議すべからざることである。循環といふ思想は幾分か之を思議せしめるに足る。汲めども盡きぬは流れ出たものが循環して絶えず本に還へるからである。循環するものにして始めて無際限に流れて盡きざる譯である。地上の水は上りて又地下に還る故泉は盡きず。又凡て生命は循環周流する、周流するから生きをる。新陳代謝は周流である。意識の最深統一は意識を意識して、反省を反省して絶間なく己れに返へり緊密周流間髪を容れざる所にあり、洩らす所一もなき故最深の統一である、一一に現前する統一である故一切を一に融會する。絶えず反省して循環して己れに還るが己れに還る所に安住落在あつて宗教道德之に據る。無窮に流れ永遠に去つて再び還らずとは戰慄すべき觀ではないか。底を知らぬ奈落到沈みゆくといふとが考へてだに恐ろしきは歸る期のなきもの、再び遭ふことの出来ぬ永遠の別れであるからであらう。ベルグソンの流動の哲學を評して其宗教的歸結は悲觀懷疑に了らずやと危ぶむものもあるは一應の理がある。ベルグソンは靜不變をまだ十分に説かぬからである。動即靜、變不變一致は循環周流些の凝滯無く

此の間隙無き所にある。此所に純動は依然家郷にあるの思あらしめ、榮辱苦樂一貫も此所に求めらるべきかを思はしめる。這裡に人生の慰めもなければならぬ。年々歳歳花は新に開くとはいふものの舊に仍てこれ去年の花なればこそ楽しく懐かしいのであらう。所謂花ぞ昔の香ににほいける趣があつて人の心も頼母しいのである。實在にあつては二度と同じことは起らぬもの、創造して日に新なるものとはいふが、歴史は鑑であり人情古今相同じい所があるから人生に落着を見るのであらう。實に循環ならばこれ變じて未だ曾て變せず、流れて未だ曾て流れず、去つて去らざるのである。之を本に反へれば無限に創造するといふのである。自ら動かずして萬物を動かすといふが、動く萬物の外に動かざる第一者あるのではなからう。循環するものを見るに何れの點をとつても皆悉く出づると同時に入り去ると同時に歸り、有限限定と同時に無限統一ならざるはない。是れ所謂具體的統一、即ち直接的統一であつて、有限無限の無間なる所以である。かくて感謝を以て己れの本に反省し敬愛を以て物に接すれば限定せられて出づる新内容は悉く是れ萬古の舊知であつて、絶えず清新なるを覺えると共に無限の懐かしさを感じるのである。是れ感謝が反省するが故に統一する、統一するが故に限定する所以、反へるが故に生ずる所以

である。故に感謝はヘルバルトが分解して示した通り報復であると共に又新なる贈與である、新なる贈與なるが故却て又感謝に價いする、感謝は感謝を喚起して無限に互に相反映して盡期がないのである。反省は自己を反省して無窮に周流するのである。

感謝の情は無限なる孝の理の經驗的發露ともいふべきであつて、先づ我が生みの親に對して發するのは實に自然の順路である、我生命の直接の本は親である。生命とは生きて息まざるもの、子を生み且つ之を愛育して止まざるは生生不息の理の最も直接なる現はれである。感謝は還つて此生生の理に參せしむるものである。藤樹曰く我身は父母の身を分ちて受け、父母の身は天地の氣を分ちて受け、天地は太虛の氣を分ちて受けたるものなれば、本來我身は太虛神明の分身變化なる故に太虛神明の本體を明にして失はざるを以て身を立つるといふなりと。故に親の愛は自然的の情なるも其淵源は宇宙の最も深奥なる所にありとなすのである。これ親の恩の廣大なる所以であつて、經驗的事實としては親の愛は人によつて或は厚薄の相違ありとしても其理は無限の愛である、一般の人情としては子を愛するは際限を知らぬのである。感謝の情は無限愛、生命の源頭に還る端緒である、經驗的から超經驗的

に、自然から精神に反へらしむるのである。感謝敬愛は有限無限の接觸であり、自然的にして精神的なるべき人間に特有である。親の愛は本から末に分化發展するもの、限定的、本能的である。子の感謝は末から本へ反省するもの、本能を精神化するもの、限定を具體化するものである。愛も感謝によつて理性的となる。これ親の慈を以てせず子の孝を以て仁を爲すの本、道德の原理となす所以である。又經驗的は超經驗的に制約せらるるも超經驗的は經驗的に制約せられず即ち經驗的を超越するから、感謝は親恩の經驗的偶然性たる厚薄深淺などに比例することなく直ちに無限の感謝を發し得る。これ孝の普遍性を見るべき一端である。

四

流通循環といふも若し只記憶によつてつながれ悟性によつて連結せらるるだけなれば未だ眞の流通ではない。葉の茂げれる現在に於ては花の盛かりは只記憶としてのみし存て夢か現つか定かならず、秋風落葉の現在に於ては青葉の茂げりも亦同前に過去の夢である、かくて四時の循環も只夢幻の去來の如くであつて現實の境ではない。若し四時の循環そのものが直ちに現實たらんとせば梢に蕾を含む現刹

那に夏秋冬が躍如として現前すべきである。此時樹は始めて活き、觀る我も始めて活き、循環の眞に接すべきである。記憶を辿りて智性によつて考へただけでは四時を髣髴せしめるに過ぎぬ。心的生活と謂はるるものも見聞覺知の連續であり欲望満足の繰返へしだけならば往時渺茫として夢の如く人生は無常である。昨日欲を満たしたことが今の内容に何の役にも立たぬ。智識は其自身の統一は固より有つてをるが未だ何等の自己でもない。一一に現前して一切を一に會する統一が實にせられて始めて一貫があり歴史があり、始めて自己が成り人格が現はれる、一生が常に現實である。此統一を得て見聞覺知も欲望満足も其面目を新にして人格の内容となる。これ即ち精神の實現である。

精神とは意識の徹底であるといふことを得。意識は本初から内面的のものであるが、此内面的を徹底してゆけば其分内ならぬものは一つもあり得ないから一心の微も全世界に瀰漫して其外なるものは一つもない。既に外がなければ内も無いから内面的の徹底は内外透到であつて、無依の自由界でなければならぬ。自由と精神とは同じい。これと區別せらるべきものは自然であつて、自然とは自然的必然といふと同じい。飢は食に、渴は飲に、欲は名利に依つて居る、知覺は知覺對象に依つて居

る。凡て對象に依つて立つものは内に自ら對象を得ぬから外に之を見出す。之を外に見出すから之に制約せられてすべて必然的となる。欲望や知覺は外に向い物を追ふのであるが、自ら主となるものには内ならざるものはない。あらゆる外界との接觸を媒介する身體のあらゆる知覺運動に現前せざるなき意識には心外の身なく身外の心がないから、心身口は洞然として一でなければならぬ。心身口的一致は言行の信なることである。言行信にして社會は成る。(これ西田教授が身心一如は社會的といふと同じいとせらるる所以であらう)。道德は信の一字であるといふことを得。信は内外の合一であつて、公共客觀的の眞理である。信を以て接するとき始めて他人は單なる認識對象、單なる欲望満足の道具たるを脱して、單なる自然物たらずして、同一の客觀界裡に我と相對する精神となる、精神たる彼に相對する我であるから我も精神となる。信を以て交るとき彼と我は一箇客觀的公共眞理の各半面である。於是抽象的個我を超へて彼我に流通循環する客觀的精神界の限定たる具體的個我の出現を見る。眞の社會は具體的個我の世界である。故に又眞の社會にして始めて歴史的である。歴史的連續が一切連續の極致であつて、極致の連續一貫が精神の實現である。終始一貫であつて始めて自己があり歴史があるから、只歴

史に於てのみ人格が實現せられる。(組平氏認  
談論參照)

他を自然視するものは自らも自然であり、他を器具視するものは自らも器具である。各々自ら利する心のみで賈買交換有無相通ずる生活は只理に於て社會的であつて、現實に社會的でない、未だ自然的たるを免れない。具體的普遍の統一に達せざる抽象的個我の對立は優勝劣敗の法則の行はるる自然界である。産業如何に發達するとも若し只自然を征服利用することのみを知つて自然を友とすることを知らず、勞資協調如何に巧みなるも若し只互に他を方便とするを知つて互に他を目的のものとなすを知らざれば今日の經濟的大組織は生存競争的生物界又は器械運轉の抽象界である、文化でもなく精神界でもない。かかる見地では歴史は無視せられ、隨處隨時に人欲人智を以て複雑なる大機關を空想し之を誤つて社會組織と考へる。經濟の發達、科學智術の發達が文化に數へらるるは、人格的連貫を背後に控へて居るからである、さなくば夫の發達は所謂人をして最惡の禽獸たらしむるに過ぎぬ。人格的關係成つて自然は文化に、功利は道德に轉ずる。於是知る、眞の社會は只報徳に本づく社會のみである。一度び感謝を以て周圍に對すれば作られた米麥も作つた我身も諸共に舉げて悉く他の賜である、土壤も米を恵ぐみくれた人格と見えて來る。

我身を悉く他の賜と覺えしむる感謝の念は抽象的個我を否定して具體的精神界に反へらしめる。我がなす業は當然他から代償さるべき債權ではなく、既に負へる債務の辨償である、受けてをる恩恵への報謝がある。資本の呈供も筋肉の労働も心勞も研學も報酬を要求すべき我が業ではなく、かかる働きをなし得るまでに育成した諸の恩恵への感謝の言葉である。既に感謝の發現であるからヘルバルトの言へる通り只報復のみでなく又新なる贈遺である、故に却て又感謝に償する。感謝は感謝を互に相喚起して際限無く反映し恩は同時に報恩、報恩は同時に恩であつて生命は無窮に續く。肉體の労働も機械の運轉も悉く感謝の發言であり精神の光彩を帯びる、精神界が發する、精神界が眞の社會である、カントの所謂目的國である。感謝、敬愛は宗教道德の言葉である。宗教道德と社會とは同體である、宗教道德無き所は本質に於ては生物的本能的である群居あるのみである。社會問題は宗教道德問題である、宗教道德に役せられて經濟は社會的意義を得て來る。道德を措いては社會問題としての經濟問題は解決は出來ぬ。(アドラトの倫理運動の主意もラッセルの社會改造論の結論もこれに外ならぬ。) (完)